南風の杜

シマが見える　平良次子…… 1

飛び安里関係資料について　平田　守…… 55

折口信夫と南風原　粟国恭子…… 67

命名見聞（ナージキー）　大城和喜…… 85

グスク時代の南風原　安里　進…… 91

南風原文化センター紀要　創刊号

飛び安里関係資料について

平　田　　守

はじめに

「飛び安里」とは、日本で最初に飛行機を作り、空を飛んだといわれる人物である。4年ほど前に新聞やテレビ等で大きく取り上げられ、沖縄だけでなく全国的に知られるようになった。その後、沖縄市では芝居がつくられて上演され、ここ南風原町では初飛翔顕彰碑の建立が進められている。

ところがその知名度の割には、いまだに、「飛び安里」とはだれなのか、どこで・いつ飛んだのか、どんな飛行機だったのか、肝心な点がほとんどわかっていないといってもいい。明確な”証拠”がないという点からすれば「飛び安里」は伝説上の人物なのである。

町史編集室では、飛び安里が南風原で初飛行を行ったと伝えられていることから、関係する資料の収集に取り組んできた。その結果、大正から現在に至るいくつかの資料を集めることができた。資料の収集にとどまり、裏付けの調査までは至っておらず不完全・不徹底ではあるが、ここでこれらの資料を紹介するとともにいくらかの雑感を述べてみたいと思う。

1、戦前の文献資料

『球陽』など王府時代の記録からは、飛び安里の実在を示す資料は見つかっていない。高良倉吉氏も「琉球王府の文献に出ていないか読みあさったが結局見つからなかった。当時の文献に記されていないので歴史的事実としては確認できない（琉球新報　1987年6月7日）」と断定している。

これまでに収集できた戦前の資料は、書籍・雑誌等　9点、新聞記事　9点である。

① 琉球新報　1915年（大正4）5月29日

＜概要：「百年前の飛行家」　今から120～130年前、首里の赤田に王府の煙火

（花火）係で「煙火安里」と呼ばれた人がいた。この人は、花火の他に飛行機の発明に苦心し、遂に安里式飛行機を製造したが、飛ぶまでには至らず死んでしまった。その子孫は現在越来におり、その設計図も残っているとのことだ。＞

現在確認できている飛び安里に関する資料としては最も古い。この年6月、那覇の潟原で沖縄で初めての飛行大会が開かれている。この大会は琉球新報社が主催したもので、大会を盛り上げるために連日飛行機に関する話題を報道した。その中でこの「煙火安里」の話が紹介されたのである。結局飛行大会は、飛行機が離陸に失敗し、けが人を出すなど琉球新報社の大失態に終ったが、この前後沖縄は飛行機ブームに沸いている。早速、飛行機を取り上げた歌劇が2ヶ所の劇場で上演されるなど、人々の飛行機に対する関心は非常に高いものであった。したがって、「煙火安里」の話が当時どこで伝承されていたかは不明だが、この飛行大会を契機にして、広く知られるようになったものと思われる。

② 「科学畫報」　巻・号不明　新光社　発行年不明

（資料提供者の島袋和幸氏によれば、大正末期に発行されたもので、たぶん13年頃とのこと。）

＜概要：　「二百年前の日本辺土の鬼才」　今より200年前、沖縄県越来村に安里某なる人がいて飛行機を発明した。この飛行機は弓の弾力を応用し、弓を水平に支柱に取り付け、弓上に鳥翼型の翼を設け、弦を足に結んで弾力により羽翼を上下する構造になっていた。彼は、ある暴風の日に、泡瀬村近くの断崖から風に向かって翼を羽ばたきうって飛行したとのことである。その後、彼の生家は「飛び安里」と俗称され、彼が板に描いた設計図が保存されているとのことで、現在複写を依頼中である。＞

この記事を書いたのは、沖縄出身の宮里良保という科学画報の記者で、飛び安里の情報で信頼度の高いものは、ほとんどが彼の手によるものである。この記事によると、「最近聞き及んだもので、未だ我が国航空界に知られていない」とのことで、飛行機の構造や飛行実験の部分については、引用の形をとって書かれている。これが、なんらかの形で発表されたものからの引用なのか、それとも宮里氏が個人的に耳にしたものなのか、非常に大きな問題なのだが不明である。

③ 「科学畫報」＜第18巻　臨時増刊科学畫報叢書第8篇　航空の驚異＞

新光社　1932年（昭和７）

内容は②とほぼ同じ。ただ、「板に描かれた設計図が近年まで保存されていたが、同村の人へ紹介したら住家改築の際紛失したとの返事をうけた」との点に違いがある。

④　仲宗根源和編『沖縄縣人物風景寫眞帖』　沖縄縣人物風景寫眞帖刊行會

1933年（昭和８）

②とまったく同じであり、転載したものと考えられる。執筆者の宮里良保氏は、この写真帖の編集委員でもある。

⑤　大阪毎日新聞西部毎日　1933年７月28日

「二百年の昔　沖縄で飛行機」

飛び安里の情報に関しては②とまったく同じであるが、飛び安里の居住地を越来村字胡屋と字まで明確にした点に違いがある。④の発行日が７月１日となっており、多分それから情報を得たのではないだろうか。

⑥　大阪朝日新聞附録九州朝日　1933年７月28日

「二百年前に飛行機を発明」

内容は⑤と同じ。

⑦　東京朝日新聞　1933年７月31日

⑭⑮の中で引用されているが原資料は入手できていない。内容は⑥とほぼ同じようである。

⑧　沖縄日報　1935年（昭和10）３月21日

⑭⑮の中で引用されているが原資料は入手できていない。

<概要：　系図を見ると空を飛んだという人物の記載はないが、1768年に首里鳥小堀村で生まれ、花火の名人だった安里周祥が飛び安里であると推定される。越来の安里家は、明治の初年頃首里から下ってきたもので、飛び安里が飛んだのは南風原間切の津嘉山村である。その飛行機は、鳥の羽をたくさん集めて作ったとのこと。安里家には飛行機の設計図と思われる記録がたくさん残っていたが、火災などで減り、やがてその始末

に窮して先祖に返すつもりで燃やしてしまった。＞

この記事は、宮里良保氏が帰省し、現地調査をした際の報道である。同行取材した沖縄日報の古波蔵記者が書いた（「鳥人飛び安里考」沖縄タイムス　1964年９月20日）とされる。記事によると宮里氏は、1935年３月20日に越来村字越来を訪れ、飛び安里の子孫である安里ゴゼイさん（当時76歳位）より聞き取り調査を行い、系図を見せてもらっている。

⑨　大阪毎日新聞（鹿児島・沖縄版）　1935年３月22日

「約百年の昔　大空を天翔る」

内容は⑧と同じ。

⑩　日布時事　1935年４月17日

（比嘉武信編『新聞にみるハワイの沖縄人90年（戦前編）』　若夏社　1990年発行より）

ハワイの日本語新聞。内容をみると、ほとんど⑧からの引用である。初出の情報としては、「周祥の曾祖父、安里親雲上は支那、日本より花火術を学び、奥義を極めて子孫に伝え」たとか、周祥が「花火で空に『松竹梅』の字を書い」たとかがある。また、周祥の子孫で安里ゴゼイさんの息子にあたる、ハワイ移民の周規氏の消息にもふれている。

⑪　航空協会編『日本航空史』＜乾巻＞　航空協会　1936年（昭和11）

日本の歴史上に伝えられている飛行機の発明者として、表具屋幸吉と並んで紹介されている。内容は②とほとんど同じである。

⑫　「科学ペン」＜４巻４号＞　科学ペン社　1939年（昭和14）

宮里良保氏が、「古琉球の鳥人」とのタイトルで４ページにわたって紹介している。内容については、②および⑧と同じである。初出の情報としては、飛行実験の際「万一の用意にと機体の一部に縄を結び、それの一端を娘にもたせていつもの断崖上からバタバタと鼓翼しながら離陸したところが、強風のため高く吹き揚げられた。それを眺めて、驚いた娘は、力一ぱい綱をひっぱったので、地響きたてて地上に墜落し、搭乗者は幸に

無事であった」との伝承の紹介がある。また、安里周祥が花火係として活躍したことを、系図をもとに詳しく紹介している。

⑬　大阪朝日新聞（鹿児島・沖縄版）　1940年（昭和15）3月2日

「世に出る『飛ぶ安里』」

元越来小学校校長（当時小禄小学校校長）の與那國善三氏の調査を紹介している。飛び安里の子孫（たぶんゴゼイさんであろう）に会って聞いたとのことで、その内容は基本的には宮里良保氏の調査と同じであるが、伝説的な要素がかなり強くなっている。與那國氏は、飛び安里が飛んだのは180年前の尚穆王の時代としており（根拠は不明）、「孤島苦を飛行機によって解消しようと夢見て、遂に自分の重量を計り、海鳥・山鳥の羽をあつめて自分の重量と同じくして飛んだといふ」「当時はかかる飛道具や世を迷わすものを発明することは国禁になっていたので安里氏は飛行機の道具を全部天井裏に隠し置き自分一人で色々工夫考察して完成を期して喜んでいたといふ」との伝承を紹介している。ここで注目されるのは、宮里氏と同じく「同家の系図を見ると飛行機に関する記録はない」と断言している点である。（実際に見たかどうかは疑問が残る）

⑭　竹内正虎『日本航空発達史』　相模書房　1940年

伝説を含め飛行に挑戦した日本人を紹介し、その中で「沖縄の鳥人」とのタイトルで5ページにわたって書かれている。大部分は、⑦（東京朝日新聞）と⑧（沖縄日報）の引用で、その他についてはほぼ⑫と同じである。

⑮　村川　翆『航空発達史』　弘文堂書房　1941年（昭和16）

⑭と同じく東京朝日新聞と沖縄日報の記事を紹介している。どうも⑭をもとにして書かれたようである。この本で注目されるのが、飛び安里の飛行機の想像図が掲載されていることである。「大槻四郎画伯の『飛ぶ安里の図』を真似して書いた想像画」との解説であるが、『飛ぶ安里の図』がどういったものかについては説明がない。

最近になって、「旧陸軍省嘱託の大槻四郎画伯が陸軍省調査の資料をもとに描いたもの（「資料から模型制作」沖縄タイムス　1987年5月10日）」との報道がされたが、町史編集室としてはまだ確認できていない。

⑯ 野口　昴『征空物語』　七人社　1941年

既刊資料をもとにしての執筆である。

⑰ 大阪朝日新聞（鹿児島・沖縄版）　1942年（昭和17）5月23日

「誇る沖縄お国自慢」

既刊資料をもとにしての記事である。

⑱ 仁村　俊『航空五十年史』　鱒書房　1943年（昭和18）

既刊資料をもとにしての執筆である。

2、戦後の文献資料

収集できた戦後の資料は、書籍・雑誌等39点、新聞記事53点である。その中から主な資料だけを紹介したい。なお、顕彰事業関係および飛び安里展関係の記事については割愛する。

◎書籍・雑誌等

日本航空協会編『日本航空史』<明治・大正編>　日本航空協会　(1956)

「コザ市報」<第11号>　コザ市役所　(1958)

「航空情報」<第100号>　酣燈社　(1959)

「守礼の光」<第98号>　琉球列島米国高等弁務官府　(1967)

沖縄風土記刊行会編『沖縄風土記全集』<第3巻　コザ市編>　沖縄風土記刊行会　(1968)

比嘉朝進編『沖縄風土記全集』<第4巻　南風原村・大里村・与那原町編>　沖縄風土記社　(1968)

せそこちずえ『The Legends of The Ryukyus』　沖縄風土記社　(1969)

せそこちずえ『オキナワの童話』　沖縄風土記社　(1969)

斎藤茂太『飛行機とともに』　中央公論社　(1972)

内藤一郎『にっぽん飛行機物語』<上>　雄山閣出版　(1972)

コザ市編『コザ市史』　コザ市　(1974)
斎藤茂太『ヒコーキ談議』　番町書房　(1975)
高良倉吉『沖縄歴史への視点』　沖縄タイムス社　(1981)
南風原民話の会編『ふるさとの民話南風原町』<第1集>　南風原町教育委員会　(1981)
吉村　昭『虹の翼』　文藝春秋　(1981)
南風原民話の会編『ふるさとの民話南風原町』<第2集>　南風原町教育委員会　(1983)
山城善三・佐久田繁『明治・大正・昭和　沖縄事始め世相史事典』　月刊沖縄社　(1983)
大城辰雄『ふる里津嘉山』　大城辰雄（自費出版）　(1984)
「沖縄フェース」<第10号>　沖縄フェース出版　(1987)
「飛び安里」<第1～2号>　飛び鳥安里顕彰碑建立実行委員会　(1987)
比嘉朝進『沖縄の伝説100のナゾ』　沖縄総合図書　(1987)
沖縄タイムス・南西航空『世界の鳥人・飛び安里』　沖縄タイムス・南西航空　(1987)
沖縄市立図書館編　『沖縄市史』<第8巻資料編7・下>　沖縄市教育委員会　(1988)
「南島文化研究所所報」<第32号>　沖縄国際大学南島文化研究所　(1988)
「Sky Sports」<1988年1～2月号>　イカロス出版　(1988)

◎新聞記事

「科学者トビ安里と花火師（ヒハナジ安里）」　新聞名・発行年不明　(1954？)
「航空士と花火師」　中部情報　(1958、1、1)
「約150年も前に空を飛んだ安里周祥の話」　沖縄タイムス　(1958、7、12)
「飛び安里の遺骨空を飛んでハワイへ」　沖縄タイムス　(1958、8、9)
「脚光浴びる飛び安里」　沖縄タイムス　(1964、9、20)
「鳥人「飛安里」考」　沖縄タイムス　(1964、9、20～22)
「飛び安里の子孫　飛行機野郎が感謝の対面」　The Hawaii Hochi　(1974、7、13)
「飛び安里の偉業顕彰」　沖縄タイムス　(1987、1、26)
「想像図みつかる」　沖縄タイムス　(1987、2、14)

「飛び安里が飛んだ地は？」　沖縄タイムス　(1987、3、13)
「飛び安里と津嘉山森」　沖縄タイムス　(1987、3、29)
「資料から模型制作」　沖縄タイムス　(1987、5、10)
「再現へ夢ふくらむ」　沖縄タイムス　(1987、6、6)
「初飛行から200年<安里周當>の人物像探る」　琉球新報　(1987、6、7)
「航空関係者と子孫が語る」　沖縄タイムス　(1987、6、26)
「飛び上がった！ふわっと浮上！」　沖縄タイムス　(1987、7、28)
「飛び安里200年展の意義」　沖縄タイムス　(1987、8、5)

戦後の資料のほとんどが、戦前において既に明らかになった情報をもとにして書かれたものであるが、一つだけ大きな変化があった。それは、宮里調査以来の「飛び安里＝周祥」説に変わって、その父である周當が飛び安里であるとの説が急浮上した点である。越来の安里家は、1957年に先祖代々の遺骨をハワイに移しているが、この時に厨子甕の銘書から判断されたことである。（「飛び安里の遺骨空を飛んでハワイへ」沖縄タイムス　1958年8月9日）その根拠は、宮里調査による周祥の生年と厨子甕の銘書から判断される周當の妻の生年とがほぼ同じであり、これはおかしいとのことからであった。息子と母親の生年が同じというのは考えられない。したがって、宮里調査の周祥とは周當の誤りであるとの結論であった。（厨子甕に周當の生年を推測する記載はなかった。）この記事以後、「飛び安里＝周當」として飛び安里の話は語られていくようになる。

「飛び安里＝周當」説以外に、戦後において発見（発表）された新情報はほとんどない。逆に、<老後は妻の実家のある越来で暮らし、そこでも飛んでいた。その場所を故郷である津嘉山の名をとって津嘉山森と呼ぶようになった>とか、<当時の諺に「与那原の潮は干いても安里家の財産は減らないだろう」といわれたほどの富豪であった>とかの伝説的な話が多くなってくる。

3、民話・伝承

南風原では、津嘉山と大名に飛び安里の話が伝承されており、『ふるさとの民話南風原町』の第1集および第2集に収録されている。

第1集に収録されている津嘉山の伝承は、羽を背中につけて松の木から飛んだが落ちて

しまった、という話である。「飛び安里初飛翔顕彰碑建立実行委員会」が津嘉山在住の70歳以上の古老達より行った聞き取り調査の資料を見ると、話者によって飛んだ人物や飛んだ場所、飛行の成否等にかなりの違いがみられる。

第2集に収録されている大名の伝承は、津嘉山の伝承とはかなり違い、飛行後の後日談が中心になっている。ちょっと内容は複雑なのであるが、簡単にいうと、飛び安里は飛ぶことには成功したが、大それたことをしたというので捕らえられ、自宅に監禁されたとの話である。

4、系図等

2点の頂姓安里家系図（「頂姓正統正系図」）のコピーを入手している。1点は安里家一門の系図で、もう1点は首里鳥堀の安里家のみの系図を軸物にしたものである。いずれも戦後作成されたもので、琉球王府認定の家譜ではない。

そこでまず、安里家が士族であったかどうかだが、琉球王府の系図座に保管されていた家譜（先島・久米島系を除く）の総目録とされる『氏集』には、頂了章安里親雲上周清を元祖とする2冊の家譜が掲載されている。つまり、頂姓安里家は本家と分家の計2戸あったことになる。

『氏集』より

①大宗頂了章安里親雲上周清　　頂氏　　安里筑登之親雲上

②元祖安里筑登之親雲上周清三世安里筑登之　　頂氏　　安里筑登之親雲上
　親雲上周興支流三子頂為行安里筑登之周富

また、明治36年の「砂糖消費税法改正之儀ニ付請願」書の中に、

「越来間切越来村十一番地　　士族　　農　　安里　周穎　　天保六年（1835）八月二日生」

の署名があり、越来の安里家は首里から移り住んだ士族であることが確認できる。

入手した「系図」では、大宗が安里親雲上周盈、一世が周冨（周當の父）となっており、周冨の側には「俗ニトビ安里ト称ス」と記載されている。そのため、安里門中では飛び安

里とは周冨であると信じられている。しかし、戦前に安里家の「系図」を見た宮里良保氏や與那國善三氏は、ともに「飛行機を発明したとも飛んだとも書きのこされていない（宮里良保）」「同家の系図を見ると飛行機に関する記録はない（與那國善三）」と述べているのである。宮里氏を信じれば、「俗ニトビ安里ト称ス」は戦後になって書き加えられたということになる。そうしたことなどから、現在の系図をもとにして飛び安里を考える場合は、慎重になる必要があるだろう。

参考のために、「系図」とゴゼイさんからの聞き取りをもとに宮里氏が記録した安里周祥の略歴を紹介しておこう。「系図には公式に任命された役とその内容のみが記されて」いたとのことである

＜安里周祥＞

明和５年（1768）　安里周當の四男として生まれる。
13歳で元服
17歳で任官
寛政12年（1800）　花火主取兼勤仕手
冊封使の歓待の席で手花火、流星、玉花火などのほか、「自分の墜つるも顧みず、精力を尽くして御当地にては始めての火字、松竹梅などを出し」
冊封使帰還の際は、「海賊御用心の火號百本」の調製を命ぜられ、「首尾能く相勤め冥加のほど」
（「科学ペン」４巻４号より）

なお、1800年の冊封使来琉の際、花火係だった田場筑登之親雲上兼教の家譜（詹姓平敷家家譜）には、兼教が1796年に花火係を命じられたことや、花火の功によって褒賞を受けたことなどが記されている。

おわりに

本稿では、飛び安里に関する資料の紹介とその内容について若干の検討を行ってみた。

文献資料を年代順に並べ検討することで、情報の整理を図ったのであるが、それによって文献上確認できる飛び安里についての信頼できる調査は、宮里良保氏のものだけであることがわかる。「帝国大学、県警察部、第6師団沖縄連隊区指令部の三者が事績調査を競っていた」との話もあるが、これも“伝説的”で、調査報告書はもちろんのこと、それを裏付ける資料は全く無い。もちろん、全国的になった話題なので、当然様々な「調査」は行われただろうが、専門家が乗り出した本格的な調査は無かったようである。1942年に沖縄連隊の調査が新聞に報道された（『世界の鳥人・飛び安里』）という話も、それらしい記事は、前述したように既刊資料をもとにしたもので新味はない。

以上紹介してきたように、飛び安里に関する話には、証拠・根拠がないままに新たな伝承との形で書き加えられ、やがてそれを“史実”として引用していったものが多いのである。もちろん宮里調査にしろ、伝承の聞き取り調査が中心であって、信頼度には限界がある。

宮里氏の調査の際、ゴゼイさんは、飛び安里が先祖の誰かわからなかったといわれる。それが半世紀を経て、話がここまで豊かになった。これは、飛び安里が沖縄の誇りであり、県民皆が共有する伝説として育まれていったものといえるであろう。飛び安里関係資料の検討は、あたかも一つの伝説が生まれ、育っていく過程を見ているようであった。

最後に、蛇足ながら付け加えさせてもらいたい。これまで資料を紹介する中で、否定的なことばかりを述べてきた。文献上からは、どうみてもそうした結論しか出ないのである。しかし、「飛び安里」と呼ばれた人物がいたのはほぼ事実である。そして、南風原では民話との形でこの話は愛されている。史実として追い求めれば、「飛び安里」の飛行機は飛ばなかったかもしれないし、あるいは飛行機を作っていないのかもしれない。だが、飛んだとか飛ばなかったとかいう議論はあまり意味がないだろう。子供たちに夢を与えるわが町の伝説として、大切にしていけばいいのではないだろうか。鳥のように空を飛ぶことにあこがれ、ロマンを持ち続けた人物がいたことだけは確かなのだから。

※　本稿で紹介した資料のほとんどは、「飛び安里」初飛翔顕彰記念実行委員会発行（1991年8月）の『資料集　飛び安里』に収録されている。

（ひらた まもる・南風原町史編集室）

1991（平成３）年　南風の杜
南風原文化センター紀要　創刊号

発　行　南風原文化センター
沖縄県南風原町兼城 716
TEL 098－889－7399
印　刷　上之山印刷所
南風原町兼城 577
TEL 098－889－3222